

中秋月を賞す

西郷南洲

中秋月に歩す鴨水の涯

十有余回家に在らざる

自ら笑う東西萍水の客

明年何れの処にか光華を賞せん

【作者】西郷隆盛（一八二八〜一八七七年）。幕末〜明治初めの薩摩藩士、軍人、政治家。下級武士の出身だが藩主島津斉彬によって拔擢された。斉彬の死後は失脚と復活を繰り返しながら頭角をあらわし、薩摩藩を代表する実力者として活躍、薩長同盟を締結して戊辰戦争を主導した。江戸城総攻撃では勝海舟との話し合いにより無血開城を実現した。維新後は陸軍大将などを歴任したが、征韓論をめぐる大久保利通らと対立、明治六（一八七三）年九月、官職を辞して下野し鹿児島へ帰った。その後、明治新政府の政策に鹿児島県士族の不満が高まり、明治十（一八七七）年、彼らの暴発をきっかけに西南戦争の指導者となるが、政府軍に敗れて自刃した。号は南洲。維新三傑の一人と評される。

【語釈】*中秋：秋の中ごろ。特に秋の真ん中、陰暦八月十五日。いわゆる中秋の名月の日であり、家族で月見をする日。*鴨水：京都の鴨川。*萍水客：浮草が水に漂うようにさすらう旅人。*光華：月の光。

【通釈】中秋のこの日、月の光のもと、鴨川べりを歩いていく、思えば、この十年あまり、月見のときに故郷の家にはいたことがない。自分で笑うしかないが、東へ西へと浮草のようにさすらう私は、来年にはいったいどこで月の光をめぐることになるのだろうか

【備考】慶應元年（一八六五年）の作。薩長同盟締結に向けた交渉を本格化させ、翌慶應二（一八六六）年一月には薩長同盟が締結されます。この詩が作られたのはまさに幕末維新の最大のターニングポイントを目前にした時期であり、西郷自身がその歴史の渦のど真ん中にいたため、故郷の家でのんびり月見など考えられない状況でした。だからこそ異郷の地で中秋の名月を眺めて感慨を深めたのでしょ